

Title	中央教育科学研究所との学術交流: 日中合同会議 2011年度
Author(s)	大下, 卓司
Citation	子どもの生命性と有能性を育てる教育・研究をめざして (2012), 活動報告書(2007-2011年度): 119-120
Issue Date	2012-03-30
URL	http://hdl.handle.net/2433/179690
Right	
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	publisher

日中合同会議 2011年度

1. 研究の概要

2006年10月27日、京都大学大学院教育学研究科と中国中央教育科学研究所との間に学術交流の協定が成立した。2007年1月28日には、日中教育共同研究センター設立の協定が締結された。本センターでは、日中両国の間で問題を共有し、限定的かつ具体的な研究課題に取り組んできた。本センターの過去4年間において、中国中央教育科学研究所をはじめとした中国の研究者を招き、京都大学において研究交流を行うこと、本センターの研究者が同研究所を訪れ、研究交流を行うことを継続してきた。

- ・ 2007年度
 - 6月：日中合同会議
 - 12月：公開シンポジウム「日中教育課程改革の動向」
- ・ 2008年度
 - 7月：公開シンポジウム「日中韓の教育課程・教育評価改革の動向」
 - 8月：国際教育フロンティアB「中国における教育課程改革の現状と課題」
 - 11月：日中合同会議
- ・ 2009年度
 - 6月：日中合同会議、および特別講義
 - 11月：日中合同会議
- ・ 2010年度
 - 9月：日中合同会議
 - 10月：公開シンポジウム「中国の教育改革構想—これからの10年—」

こうした歩みは、中国において著書『21世紀の日本教育改革—中日学者的視点』（2009年）が出版されるなど、研究成果として結実した。

そして今年度は、6月に中韓日シンポジウム「アジアにおけるPISA」問題を開催した。11月には、70周年を迎えた中国中央教育科学研究所（70周年を期に中国中央教育科学研究院と改称）において、今後の学術交流に向けて会合を行った。また、北京市上地実験小学校において、同小学校の教師とともに授業研究を目的とした研究会を開催した。

2. 日中合同会議（11月）

2011年11月、日中合同会議（於中国中央教育科学研究所）と北京市上地小学校での共同授業研究を目的に訪中した。

日中合同会議においては、袁振国所長より、中国が今後重点的に行う教育改革、それに対する同研究所における研究路線について報告がなされた。その中で、今後も本学教育学研究科との共同研究を重視していく

との方針が示された。これに対し、教授・田中耕治より、日中合同会議を推進してきた教育実践コラボレーション・センターが本年度で区切りを迎えるものの、教育学研究科としても共同研究を継続していくことが確認されている。また、研究において、とりわけ、教育実践の改善までを射程に入れた授業研究の意義と、それを軸に据えて共同研究を継続したいという研究構想が述べられた。



翌日、上地小学校との共同授業研究を行った。同小学校は、北京市の海淀区にある実験小学校である。海淀区には北京大学や精華大学が位置し、同区は北京市有数の文京区である。本研究に際して、除法の筆算を共通の内容として扱うことが計画された。そこで、学校改善ユニットにおいて共同研究を行っている京都市立高倉小学校において行われた除法の筆算に関する授業をビデオに撮り、共同研究の資料とした。

上地小学校においては、第3学年で除法の筆算を初めて学習する授業を観察した。猿が桃を分ける問題場面において次の3つの問題に取り組む授業である。一問目は「10個の桃を2匹で分ける」、二問目は「48個の桃を2匹で分ける」、三問目は「48個の桃を3匹で分ける」という問題が出題された。1問目において、筆算の形式で九九内の除法の計算式を表現する縦式で既習の内容と本時に初めて学習する九九外の除法を関連付けていた。2問目では、10ずつに束にされた数え棒が各ペアに配布され、操作活動とペア学習を通じて計算を行った。その後、教師が指名したペアが前で説明し、解答を確認した。48÷2では、40も8も2で割り切れるため、筆算の表記も単純で、子どもたちはすらすらと解いていた。しかしながら、3問目では、48÷3をするため、40÷3で10をまず商に立て、その後、40から30を引いた余りの10と8を合わせ、18÷3を計算することになり、2問目よりも計算過程が複雑にな

る。数え棒においても、10の束3つを3匹に分けたのち、残った束を分解し、ばらばらの8と合わせる必要がある。二問目ですらすらと解答していた子どもたちも、どのように操作すればよいのか、また、どのように筆算として表記すればよいのか、最初悩んでいる様子であった。最終的にほとんどのペアが答えを導いていた。ここでも、教師がいくつかのペアを指名し、解答を確認した。教師は様々な発問をすることで子どもの思考を促しながら、アニメーションやOHPなどを積極的に用いて、授業を展開していた。こうした授業について、授業を行った教師は、古い知識と新しい知識の連絡、つまり反省的思考が大切であるとの意図の下で行った授業研究であると授業後に補足説明を行った。



これに対し、大学院生・大下卓司が日本の授業についてビデオを主な素材として報告した。この報告は、①京都市立高倉学校の紹介、②授業ビデオの解説、③日本における3位数÷2位数（教科書及び学習指導要領）、④学力調査、⑤除法の筆算に関する授業研究から構成され、日本における除法の筆算の指導について概観するものであった。ビデオにおいては、第一に日本の授業の特徴、第二に高倉小学校の特徴、第三に授業者の特徴、という3つの視点から、黒板を用いた一斉授業が今日でも主流である点、個別学習とグループ学習、全体での交流といったサイクルが取り入れられている点など、中国との比較が行われた。ビデオの授業では、初めて3位数÷2位数を学習する場面であり、「色紙が175枚あります。35人に同じ数ずつ分けると、一人何枚になりますか」という問題に児童は取り組んだ。児童は、175を170、35を30と考え、 $170 \div 30$ を通じて5という仮商を立て、 35×5 を計算することで、仮商から商を導く。こうした計算過程を、説明することも課題として児童は取り組んだ。こうして得られた解答とそれに至る過程をグループで議論し、その後学級全体で共有する。その後、 $175 \div 32$ を行い、あまりのある計算をおこなった後、練習問題に取り組んだ。最後に、学習の振り返りを行い、授業で学習したことを言葉でまとめた。このように、日本の授業においては、計算の意味や過程の理解が目指されていることなどが特徴として挙げられた。

以上のように、両国の授業をつき合わせて交流した後、それぞれの授業について検討会が行われた。中国側の授業について、大学院生・小山英恵は、授業で教師が全体で共有した子どもの誤答について教師はそれをどのようにとらえているのか、といった質問を行った。これに対し、授業者の教師は机間指導で見つけた



誤答例を取り上げたのであり、操作によって正しい答えを出していたものの、筆算の計算過程の表記を誤ったため全体で共有し、計算過程の定着を図ったと説明した。この点に関しては他に授業を観察していた中国の教師からも発言がえられ、活発な議論となった。

他方、日本の授業については、個別学習からグループ学習、全体学習へと至るサイクルで授業が定式化されて展開される点について、子どもは飽きないのか、学習意欲は低下しないのかといった質問がなされた。これに対し、学習内容の変化や、教師があえて間違えて子どもに説明させる場面を設けるなど、学習形態は定式化しても、展開は多様であること、また、必ずしも毎回が同じというわけではなく、例えば、真正の文脈で多様なパフォーマンスを要求するパフォーマンス課題を授業に取り入れて、子どもの思考を促すという研究を行っており、学習意欲や学習内容の定着を促進する試みを行っていると説明した。

こうして、授業研究を軸とした研究会は、授業を研究するということの意義が明確に示され、閉会した。いずれの授業においても、日中間の些少の違いはあったものの、児童の分析、教材の分析、目標設定などにおいても多くの共通点や共通の課題が見られた。最後に、今回の授業で使用された両国の教科書を交換し、今後も研究を継続していくことが確認された。



3. 日中合同会議の今後

先述のとおり、日中合同研究センターは、本年度を含む5年間に、息の長い学術交流を実現し、着実に成果を生み出してきた。同センターが進めてきた地道な研究は、教育実践コラボレーション・センターが区切りを迎える本年度以降も何らかの形で継続し、ますます日中両国の教育研究に資するものとなるだろう。

(文責：大下 卓司)